



同好会ひろば

第306号

R7. 3. 12

No.6

「社会科同好会全体会 2月」 岡谷鋼機名古屋公会堂にて

2月10日(月)、社会科同好会全体会を開催しました。会の中では、名古屋市立小中学校長会 社会科部会長 沢上中学校長 堀江成孝先生、名古屋市社会科研究会委員長 長根台小学校 後藤俊輔先生よりご講話をいただきました。今年度の活動報告については、名古屋市社会科同好会事務局長 鳴海東部小学校 石垣成一より説明を行いました。また、同好会員の方々にも今年度の活動を振り返ってもらうため、円形ホワイトボードを使った話し合いを行い、様々な声をいただきました。



事務局長の最後の言葉に想いがこもっていてジーンとした。

色々な方の話が聞けて良かった。さらにつながりがもてた。

どんどん新しい取組をしていただけることを期待しています。

【 同 好 会 員 の 声 】

名古屋市社会科同好会事務局長 鳴海東部小学校 石垣成一先生

一年間の同好会活動を終えようとしている今、これまで同好会が大切にしてきた「つながり」をもてるようにしていくことは、これから先も大切にしていきたいと感じています。同世代のつながりをもてるようにすることはもちろん、様々な世代とのつながりをもてるようにしていきたいと考えています。

子どもの学び方や教員の働き方、価値観は目まぐるしく変化しています。「今、知りたい。学びたい」と同好会員が求めていることを考えて、これまでの活動内容や在り方を変容させることは大切だと感じています。しかし、それだけでは同好会活動の真の価値を見いだすのは難しいと思います。同好会員の皆様には、受け身ではなく主体的に積極的に会に参加していただきたいです。会に参加して、発言をして、声を上げていただいて、自ら同好会に参加する価値を見いだしていただきたいのです。その手助けを事務局ができたならと考えています。社会科同好会の存在意義を共に作りだしていきましょう。そして、来年・再来年だけでなく、十年先も五十年先も続けていくことができる持続可能な魅力ある同好会活動にしていけたらと願っています。



『実学としての社会科』

名古屋市立小中学校校長会 社会科部会長 沢上中学校長 堀江成孝先生

ここにお集まりの方々は、「社会科が好き」「子どもたちに社会科を好きになってほしい」「社会科の授業で子どもたちを育てたい」と思っている方々だと思います。本日は、「実学としての社会科」というテーマで、改めて社会科の目標は何という自分の考えを伝えたいと思います。

「実学」とは、「実際に社会の役に立つ学問」という意味です。昨今の研究のトレンドとして、学習についての理念や学習の方法論ばかりが注目されています。教科には、教科の目標があります。それを達成することが教科学習には求められます。その中で、理念や方法論を実現することに意識が向き、教科としての目標がおざなりになっていないでしょうか。



社会科という教科は、戦後に新しく作られた教科です。「修身」「地理」「歴史」「公民」などを統合して、社会科が作られました。当初は、「市民としての資質の育成」＝「民主主義的な社会の担い手を育成し、主体的に社会に貢献できる人間を育てること」が中心でした。昨今は、複雑化する社会の仕組みを知り、そこにある問題を理解し、適切に対応すること、多様な価値観の理解や国際的視野の育成も、社会科の大きな目標となっています。

数学や理科は、物事を精緻に見つめ、分析し、規則性や正解を見付け出します。社会科は、様々な事象を俯瞰して眺め、「空間的な広がり」や「因果関係」「社会の仕組み」などの見方・考え方を生かし、共通するものや普遍的な流れなどを見いだす教科です。

社会科は、正解や真理を見いだす学問ではありません。もちろん、不変の価値はありますが、それをベースにしながらも、様々な考え方や状況を踏まえながら調整して方向性を見いだす、言うなれば「納得解」をつくりあげる学習です。これまで想定していなかったような事案、世界的な問題の発生など、世の中が複雑化、グローバル化する中で、解決すべき課題も多くなってきています。これまでの社会科学習では、「知識・技能」は事実認識であり、「思考・判断・表現」は価値判断です。この二つを広げ深め、「社会認識」を大きくするという「社会認識論」が中心の学習となっていたのではないのでしょうか。

しかしながら、社会認識をいかに大きくしようとも、社会的事象が自分事でなければ、結局は主権者として社会に関わっていこうとしないのではないのでしょうか。今、社会科の学習はこのような直接社会に結び付くものとなっているのでしょうか。単なる評論家的な学びになっていないのでしょうか。いわゆる、実学としての価値はあるのでしょうか。

実学として、社会科の学習が「全てはエクササイズ」となるように、子どもたちには、こうした課題解決の経験を積ませていきたい。これからの社会の担い手になるためには、社会科の学習を通して問題解決の方法、新たな提案の仕方などを学んでいく必要があります。では、どのような社会科の学習が求められるのでしょうか。

社会的問題の解決を図る学習では、最初の「教材」と「問い」が大切です。この初発の思いで、「当事者性」「必然性」「切迫感」「期待感」などを引き出すことが必要です。そして、その思いを継続する学習活動の工夫、最終的な課題解決での達成感、焦燥感などの経験の繰り返しが、社会への主体的な関わりを育てることになるのではないのでしょうか。

これからの社会を担い、主体的に関わる人を育てるという目標を掲げている社会にとって、今、私が最も社会科における評価として大切だと考えている観点は「主体的に学ぶ態度」です。これを評価することが難しいことは承知しています。しかし、今の社会科においては避けて通ることができない重要な評価だと感じています。この観点の評価へのヒントとして、あえてこれまでのタブーを踏み越えるならば、私は、「参画する」ということがキーワードではないかと思います。これまで参画するところまでは評価できないと言われ、また参画することが目的化することを恐れ、この言葉はタブー視されてきました。ただ、社会科の学習において、「本当の意味で主体的」とは、問題に対して行動を起こすことであり、単に学習での「持続性」と「調整性」をはかるだけでは見ることができないのではないのでしょうか。

今、この時代だからこそ、「実学」として、この「主体的に学ぶ態度」の社会科の評価について研究を深めていただけたらと感じています。

ただ、こうして社会科という教科について、何を教えるのか、どう学ばせるのかということを議論できる仲間がいることには感謝したい。そのつながりの中で、私はたくさんのお出会いがあって、ここまで教員生活を送ることができたと感じています。この同好会活動がますます実りあるものとなることを願っています。

名古屋市社会科研究会委員長 長根台小学校 後藤俊輔先生

研究会を代表し、二点についてお話をさせていただきます。

一点目は、研究会の活動についてです。研究会では、市教研の運営、夏・冬の生活の執筆、わたしたちのきょうどの執筆をはじめ、名古屋市全体の教育に関わる活動に取り組んできました。研究会から依頼する仕事の多くは、日々の業務が多忙な中、仕事やプライベートの時間を割いてお取り組みいただいたかと思います。負担も大きかったとは思いますが、社会科教師としての自己研鑽の一つとして捉え、自身の成長につなげていただくとともに、名古屋市の社会科を支える立場になった誇りも感じいただければ幸いです。ご尽力いただきまして、ありがとうございました。皆さんの頑張りのおかげで、感謝の声が多々入っております。今後とも、依頼の際には快くお引き受けいただけると助かります。



二点目は、これからの同好会活動についてです。4月の全体会で、参加することと、近くの人を誘うことをお願いしました。そこで、皆さんに三択で聞きたいと思います。

一つ目は、授業づくり講座などの会に足を運んだり、オンラインで参加したり、体験記録の指導を受けたりするなど、同好会の活動に参加した。二つ目は、先輩や後輩、同僚などを誘った。三つ目は、会に参加しなかった人に、資料を渡したり、学んだことを話したりして、広めた。この三つです。いかがでしょうか。

私は、4月にお願いした立場ですので、授業づくり講座をはじめ、会という会は皆勤賞を目指して参加をしました。ある講座では、会場が、社会科を学びたい人でいっぱいになりました。研究会、同好会は、研究を頑張る人が参加するものという印象もありますが、そういう人もそうでない人も、会員も会員でない人も、純粋に社会科を学びたいという気持ちで参加をしていました。昨年度に比べて、多くの人が参加をしていることをうれしく思いました。

皆さん、社会科は好きですか？私も大好きです。大好きな社会科を学び、語れる同好会を、皆さんの熱意でもっと活発なものにしていきたいと思います。

「小・中学校合同発表会」

中小企業振興会館にて

1月16日(木)の小・中学校合同発表会では、各グループの今年度の研究発表と研究から見いだされた課題の協議を行いました。

各グループの研究内容や協議内容を報告します。



3・4年生グループは、単元「火事からくらしを守る」において、「プロファイリングシート」を活用し、我々のくらしを支える方々に興味を高めることができるよう工夫しました。協議では、本時の学習方法を意識させる工夫や、働く人の工夫や努力、課題を根拠にさせる工夫について話し合われました。

5年生グループは、単元「自然災害を防ぐ」において、つかむ・調べる・いかす段階にGTと出合わせることで、粘り強く学習に取り組めるよう工夫しました。協議では、粘り強く学習に取り組むために、どのような手立てが有効かについて話し合われました。

6年生グループは、単元「世界の未来と日本の役割」において、「問いマップ」を活用して問いを整理し、持続可能な解決方法について考えることができるよう工夫しました。協議では、問いマップの見取り方について話し合われました。

中学校グループは、子どもが自らの学習を調整していくことができるように、「手が届きそうな目標」を見極め、「目指す姿」と「具体的な姿」を子どもに明示し、常に共通理解を図りながら取り組みました。

地理グループは、単元「中国・四国地方」「近畿地方」において、「振り返りシートとウェビングマップ」、「追究4・4シートとまとめる4シート」を活用しました。協議では、見取りとフィードバックの方法は適切であったかについて話し合われました。

歴史グループは、単元「鎌倉時代」「幕藩体制の確立と鎖国」において、「はじめ～るシートと大観カード」、「あしあとシートとまとめるシート」を活用しました。協議では、子どもが理解しやすい「具体的な姿」や、子どもが記述する負担をどのように改善するべきかについて話し合われました。

現代社会グループは、単元「現代の民主政治と社会」において、「スタディログ」を活用しました。協議では、「目指す姿」や「具体的な姿」を生徒に意識させる上で、生徒がイメージしやすい言葉がどのような言葉であるかや、イメージを共有する手立てについて話し合われました。



発表と協議の後に、名古屋市社会科研究会 委員長 長根台小学校 後藤俊輔先生よりご指導・ご助言をいただきました。冒頭に、今年度の研究への取組に対し、感謝の言葉をいただきました。そして、どのグループの研究も、GTとの出会わせ方を工夫したり、子どもの考えを専門家に提案したりと、様々な立場の方々との出会いによって、実社会と繋ぐ「生きた教材」であったと仰っていただきました。一方で、課題として、小学校と中学校の連携を挙げられました。他地域と比べ、小学校と中学校の連携が弱いため、揃えることができる場所は揃え直すことで、小学校と中学校の連携をより強いものにし、研究に取り組んでほしいとご示唆いただきました。

今年度の研究の集大成としての小・中学校合同発表会は、様々な立場の方の支えによって、とても素晴らしい会となりました。本当にありがとうございました。

「第三回ステップアップ研修全体会 ・授業力アップ研修全体会」 名古屋都市センターにて

2月 21 日(金)に、第三回ステップアップ研修全体会・授業力アップ研修全体会を開催しました。今年度の指導体験記録を執筆した先生方の中から八名の方に、実践について紹介していただきました。小グループに分かれ、実践の概要紹介と質疑応答の時間をとりました。

小グループの意見交流では、「学びのコンパスを実践に落とし込む際には、どんなことを意識すればよいのか」という質問に対し、「子どもが自ら学び続けながらも、放任にはならず、深い学びの実現に向けて、子どもの学びを教師がある程度コントロールすることが必要ではないか。その姿が“伴走者”ではないか」など、どのグループでも活発な意見交流が行われました。今年度、指導体験記録を執筆された先生も、今後執筆に挑戦をしようとしている先生にも、得るものが多い有意義な会となりました。



来年に向けて学んだ学年の授業をつくりたいと思えた。



指導体験記録にまとめることで、自分の中で大切にしたいことが明確になった。

形だけの自由進度にならず、教科として大切なことを見失わないようにしたい。



これからも多くの人の実践に触れ、様々な実践にチャレンジしたい。

～お知らせ～

名古屋市社会科同好会公式 LINE の登録にご協力ください。右のQRコードから一人でも多くの方に登録していただき、各種案内や「同好会ひろば」などの発送物を「いつでも」「どこでも」ご覧いただければと思います。また、名古屋市社会科同好会のホームページからも、発送物をご覧いただけます。

